

歴史は未来の羅針盤



日野町史『近江日野の歴史』第一巻「自然・古代編」を平成一七年二月に刊行しました。第二巻「文化財編」は平成一八年度末に刊行予定です。このコーナーでは、町史の内容や調査報告などを紹介していきます。皆さんに町史に親しんでいただき、実際に手に取ってご覧いただきたいと思います。

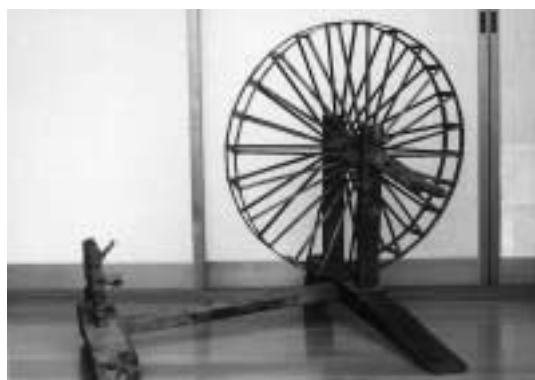
今回は、町内の皆さんに聞き取り調査で教えていただいた、昔懐かしい生活の一部をご紹介します。

### 日野のオカイコサン

「秋、柿が熟すころにアキコ（秋蚕）を始める」。これは大字増田での養蚕の伝承です。現在、もう見られない日野の産業の一つに「オカイコサン（養蚕）」があります。

養蚕は、卵から幼虫を孵化させ、育成し、蛹の状態である繭を作る作業で、日野では、江戸時代に中井源左衛門が、東北の優良な蚕種蚕の卵）と桑の木を持ち帰り広めたと言われています。その品質は「夏蚕は近江日野蚕を以て最とす」と言われるほど高く評価されています。明治時代、生糸の輸出などにより各地で養蚕業が盛んになりました。日野でも、養蚕組合が結成され、農村部でもオカイコサンは比較的大きな収入源でした。

昭和三〇年前後まで、日野では養蚕指導員の指導の下、年に二〜三回行っていました。ハルコ（春蚕）を始める五月下旬は、田植え前の大変忙しい時期でしたが、寝ずにも行ったそうです。ナツコ（夏蚕）は七月中旬から八月中旬にかけての非常に暑い時期に行うため、病気なども多く苦労しました。アキコ（秋蚕）は九月下旬から十月にかけて行われました。蚕を飼うには、ある程度の広い空間が必要でした。大字柚ではヨロク（広さがそれぞれ六畳のデイ・オクマ・ダイドコロ・ヘヤ）の畳を全部上げて建具を外し、四角いサンザ（蚕座・蚕を育てる網）が十数枚入る棚を各部屋に設置しました。部屋の四隅には温度計を置き、寒い日などは長火鉢で部屋の温度調整をしました。



▲糸車（内池）

蚕は、幼虫から蛹になるまでに、桑を食べながら四回脱皮を繰り返して成長します。養蚕家の主な仕事は、「桑やり」と「シリガエ（掃除）」です。桑畑は各地にあり、子どものころ、その桑の実をほうばって口を紫に染めたことがある方も多いたのではないのでしょうか。桑の種類には、ネズミダイシやロウソといったものがありました。卵から孵ったばかりのケゴ（幼虫）には、桑の葉の柔らかい部分を細かく切って与えます。幼虫が四回目の脱皮をするころには、枝ごと与えた桑を音をたてて食べるようになります。脱皮する前は、食欲が落ち頭を上

幼虫が蛹になることを「上蔭」といいます。蛹になろうとする蚕は、「マブシ（半分に折った藁）」の中で蛹になる場所を選び、繭を作っていきます。繭の中の蛹を大字増田では「ドドコ」といい、「ドドコが出んうちに」早く繭を出荷しなくてはなりません。日野の繭の多くは、八日市方面に出荷されたといえます。二匹の蚕がくっついてできるダングムやヨゴレマムは出荷できないので、家庭用として利用しました。大鍋で繭を煮て、四隅に釘を刺した四角い木枠に、その繭の一端を引っ掛けて伸ばすと、薄い真綿が採れます。真夏の布団洗いの時、布団の中綿（木綿）がほつれるのを防ぐために、その薄い真綿で中綿を包みました。またデンチの背の中に入れると、ことさら温かかったそうです。真綿から絹糸を紡ぐときは、糸車を使いました。現金収入としてのオカイコサンは、日常生活にも無駄なく利用されていた様子が見えます。

### ドドコが出んうちに

上げてじっとしているの、大字柚ではこの時の様子を「オカイコサン寝てはる」と言っていました。